令和四年度

入学者選抜学力試験問題

国　語

注意　答えは、すべて解答用紙に記入しなさい。
問題作成の都合上、本文を一部改変しました。

受　験　番　号

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人間はいつからこんなに夜行性をつよめたのであろうか。もちろん昼間働くのが常態であるが、こと、知的活動になると、夜ときめてしまう。[注1] 灯下親しむの候[注2]、などということばは電灯などのない昔から、読書は夜するものという考えがあったことを示している。〔Ａ〕

そして、いつのまにか、夜の信仰とも言うべきものをつくりあげてしまった。現代の若ものも当然のように宵っ張りの朝寝坊になって、勉強は夜でなくてはできないものと、思いこんでいる。朝早く起きるなどと言えば、老人くさい、と笑われる始末である。

夜考えることと、朝考えることとは、同じ人間でも、かなり違っているのではないか、ということを何年か前に気づいた。朝の考えは夜の考えとはなぜ同じではないのか。考えてみると、おもしろい問題である。〔Ｂ〕

夜、寝る前に書いた手紙を、朝、目をさましてから、読み返してみると、どうしてこんなことを書いてしまったのか、とわれながら不思議である。

外国で出た手紙の心得を書いた本に、感情的になって書いた手紙は、かならず、一晩そのままにしておいて、翌日、読みかえしてから投函せよ。一晩たってみると、そのまま出すのがためらわれることがすくなくない。[1]そういう注意があった。現実的な知恵である。〔Ｃ〕

それに、どうも[2]朝の頭の方が、夜の頭よりも、優秀であるらしい。夜、さんざんてこずって、うまく行かなかった仕事があるとする。これはダメ。明日の朝にしよう、と思う。心のどこかで、「きょうできることをあすに延ばすな」ということわざが頭をかすめる。それをおさえて寝てしまう。

朝になって、もう一度、挑んでみる。［Ⅰ］、どうだ。ゆうべはあんなに手におえなかった問題が、するすると片づいてしまうではないか。昨夜のことが［Ⅱ］夢のようである。

はじめのうちは、そういうことがあっても、偶然だと思っていた。[3]夜の信者だったからであろう。やがて、[4]これはおかしいと考えるようになった。偶然にしては同じことがあまりにも多すぎる。おそまきながら、朝と夜とでは、同じ人間でありながら、[5]人が違うことを思い知らされたというわけである。

〝朝飯前〟ということばがある。手もとの辞書をひくと、「朝の食事をする前。『そんな事は朝飯前だ』〔＝朝飯前にも出来るほど、簡単だ〕」（『新明解国語辞典』）とある。いまの用法はこの通りだろうが、[6]もとはすこし違っていたのではないか、と疑い出した。

簡単なことだから、朝飯前なのではなく、朝の食事の前にするために、本来は、決して簡単でもなんでもないことが、さっさとできてしまい、いかにも簡単そうに見える。知らない人間が、それを朝飯前と呼んだというのではあるまいか。どんなことでも、朝飯前にすれば、[7]さっさと片付く。朝の頭はそれだけ能率がいい。〔Ｄ〕

おもしろいことに、朝の頭は楽天的であるらしい。前の晩に仕上げた文章があって、とてもこれではいけない。明日になってもう一度、書き直しをしよう、などと思って寝る。一夜明けて、さっぱりした頭で読み返してみると、まんざらでもないという気がしてくる。これでよいことにしようと考えなおす。

感情的になって書いた手紙は、朝の頭で再考すると、[注3]落第するけれども、すべてを拒むわけではない。いいところがあれば、素直に認める大らかさもある。

そういうことが何度もあって、それまでの夜型の生活を朝型に切りかえることにした。四十歳くらいのときである。まだ、それほどの年ではないが、老人がたいてい、いつのまにか朝型になっている。［E］

朝の仕事が自然なのである。朝飯前の仕事こそ、本道を行くもので、夜、灯をつけてする仕事は自然にさからっているのだ。

若いうちこそ、注4粋（いき）がって、その無理をあえてする。また、それだけの体力もある。［Ⅲ］年をとってくると、無理がきかなくなり、[8]自然に帰る。朝早く目がさめて困るというようになる。

それで、まだそれほどの年でもないうちに、老人を見倣（なら）おうと思って、夜していた仕事を朝へまわすことにした。と言って、そんなに早起きのできるわけがない。ゆっくり起きるから、朝飯前の仕事などなかなか望むべくもない。これは何とかしなくてはいけないと考えた。

英雄的早起きはできないが、朝のうちに、できることなら、朝飯前になるべくたくさんのことをしてしまいたい。それにはどうしたらいいのか。答は簡単である。

（外山　滋比古　『思考の整理学』）

注1　常態　……　普通の状態。
注2　灯火親しむの候　……　あかりをつけて読書をするのにふさわしい季節。秋の夜。
注3　落第　……　ある一定の基準に達していないこと。
注4　粋がる　……　自分からしゃれていると思って得意がる。

問1　空欄Ⅰ～Ⅲに入る適当な語を次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア　すると　　イ　もちろん　　ウ　まるで　　エ　ところが　　オ　ぜんぜん

問2　――線部1「そういう注意」とはどのような注意ですか。解答欄に合うように、本文中から五十字以内で抜き出し、最初と最後の三字で答えなさい。

問3　――線部2「朝の頭の方が、夜の頭よりも、優秀であるらしい」とあるが、朝の頭の特徴と思われる二点を、解答欄に合うように十五字以内で答えなさい。

問4　――線部3「夜の信者」とはどのような考え方の持ち主のことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　宗教にとらわれた、読書は夜するものという考え方。
イ　学校で教え込まれた、勉強は夜でなければできないという考え方。
ウ　信者になると、手に負えなかった問題が簡単に片付いてしまうという考え方。
エ　ことわざが教える通りに勉強を行うと、うまくいくという考え方。
オ　読書や知的活動を行うには、夜の方が望ましいという考え方。

問５　――線部４「これはおかしいと考えるようになった」のはなぜですか。四十字程度で答えなさい。

問６　――線部５「人が違う」とあるが人間の何が違うのか、本文中から漢字一字で抜き出しなさい。

問７　――線部６「もとはすこし違っていたのではないか」とあるが、朝飯前のことばのもとの意味について筆者はどのように考えていますか。辞書に載っている意味に対比して筆者が自らの意見を述べている一文を本文中から抜き出し、最初の五字で答えなさい。

問８　――線部７「さっさと」の品詞名を漢字で答えなさい。

問９　次の一文は本文中のどこに入れるのが適当ですか。空欄〔A〕～〔E〕の中から選び、記号で答えなさい。

あんな夜型だったのにと思う人までが、朝のうちでないと仕事ができないと言うのをきいたこともある。

問10　――線部８「自然に帰る」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　無理をして夜に働くのではなく、朝に作業をするようになること。
イ　朝早く目が覚めてしまい、自然界の動物と同じようになること。
ウ　体力的に無理がきかなくなり、自然にまかせるようになること。
エ　朝早くに目が覚めては困るので、自然と遅く寝るようになること。
オ　老人のあるべき姿を自然と見倣うようになること。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある夜、僕は塾の帰りに、明らかに様子がおかしい担任の久保先生とすれ違った。気になったので、友人である福生（ふくお）と一緒に隠れて後を追うと、先生は潤（じゅん）という同級生の家の前に立っていた。

潤の家には塀らしい塀がなく、低い生垣（いけがき）があるだけだったから、それを［A］乗り越えた。無断でよその人の敷地に入ったらさすがにまずいのではないか、と［B］したが、福生が、早く早くと囁（ささや）いてくるため、その囁きを早く止めさせたくて、僕も真似して潤の家の庭に侵入した。

ばれたらどうなるのか。

泥棒や何とか侵入罪なのでは？

不安な僕をよそに、福生はしゃがんだまま移動する。

玄関まで行ったらさすがにばれる。まずいよ、止まれ、と僕は小声で呼びかける。

「先生、私は時々、自分が嫌になって、[1]八つ当たりのように潤に厳しく当たってしまうんです」

潤のお父さんの声が聞こえたところで、僕たちは静止する。近くにある植木鉢のようなものにぶつかったが、大きな音は出なくてほっとした。

「自分が嫌に、ですか」

「先生に話すようなことではないんですが」潤のお父さんは、体の調子が悪いのだろうか。[2]つらそうな口調だった。

庭木の葉が小さく揺れた。いよいよ、雲が雨を洩らしはじめたのだ。誰にも言えない秘密を抱えきれず、もう無理、と手から落としてしまうみたいだった。

小雨と呼ぶにも、遅いリズムかもしれないが、それでも確実に、雨のしずくが僕たちを濡らしはじめる。

「自分が嫌になるようなことでもあったんですか」

「ええ、ああ、そうなんです」潤のお父さんは言う。

雨に濡れることを気にする様子もない。

何かした？　犯罪とか？　潤のお父さんが？　まさか。僕の頭の中が目まぐるしく動く。

「事故を」

[3]僕の頭には電気が走った。前にいる福生も一緒だろう。［C］こちらを振り返ってくる。

久保先生の恋人が亡くなったのは、交通事故で、だ。スピードを上げて走ってきた車にはねられた。ということは、その運転手が、潤のお父さんなのか？　そう閃（ひらめ）いた。先生がここに来たのは、そのためなのか、と思ったところで、僕はぞっとした。あの恐ろしい雰囲気は、その犯人に会うからだったのか。

先生はクラスの担任になった時、潤のお父さんを見かけて、最初の保護者会でだろうか、あの時の運転手だ！　と気づいたのかもしれない。

こんなことがあるなんて、と相当、驚いたのではないだろうか。

そして今日、ここに来た。潤のお父さんに会いに？　何のために？　さっきのあの、久保先生のぴりぴりとした恐ろしさを思い出す。

何か大変なことをするつもりだったのでは？

いや、違う。内心で、頭を［X］に振る。
運転手も事故で亡くなったはずだ。先生自身がそう言っていた。潤のお父さんのわけがない。
すると潤のお父さんが、「私が運転していたわけではないんですが」と言った。「ただ、私のせいだったのかもしれません。いえ、かも、じゃないですね。私のせいだったんですよ」
「どういうことですか」久保先生は、棒読みのように言った。
「仕事の出張先で、なんですよ。駅前の横断歩道近くで、私が落とし物をして、拾ってくれた人がいたんです。彼女が、私に返すために道路を渡ってきてくれたんですが、その時に車が」
潤のお父さんの声は、大人とは思えないほどに震えていて、迷子の子供のようだった。
雨が地面や家の屋根を叩く音がするだけだ。
久保先生は黙っている。
また、福生と目が合った。髪が濡れている。僕もそうなのだろう。
(Ⅱ)頭に当たる雨は、冷たさよりも重さを感じさせた。
福生は無言のまま、何か言いたげに僕に視線を向けた。
何も分からないよ。目でそう答える。
「車とぶつかったあの女性があの後どうなったのか、実はよく分からないんです」
先生は無言だ。
「事故が起きた時、待たせていたタクシーに、気づいたら乗っていました。仕事の用件があったのは事実ですけど、ただ、怖かったんです。逃げてしまったんです。忙しいことをいいことに、事故のことを調べようともしませんでした」
やはり先生の声は聞こえない。
「ずっと気になっているんです。私はあの時、逃げてしまって。あの女性は、私のせいで事故に遭ってしまったのに。ずっとそのことが心に引っかかっているんですよね。潤には、私のような人間になってほしくないという気持ちが強すぎて、(Ⅲ)過剰に怒ることもあって」
潤のお父さんはほとんど泣いている。雨のせいかもしれないが、それを隠そうともしていない。
雨が激しくなりはじめ、久保先生が黙っているのか喋っているのかも把握できなくなった。
さすがにこのまま二人も、立ち話を続けているわけにはいかないだろうから、そろそろ解散するはずだ。そうすれば、僕たちは解放されるだろう。
「私は別に、牧師じゃないので」久保先生の声がようやく聞こえた。「懺悔(注1)されても」
4 潤のお父さんは、見放されたかのように一瞬、表情を失った。その後で溜め息を吐く。「誰かに聞いてほしかっただけなんですよ。今日、ずっと悩んでいまして」
「今日」(注2)久保先生が呟く。
「はい、今日は特に」
「潤君のお父さんは」久保先生は声を絞り出すようだった。「お父さんは、事故に直接関係したわけではないんですよね」
「考え方によるかもしれません」
「間接的です」久保先生は早口になった。「まったく無関係と言えるかもしれません」
「いえ」
「だから。だけど」久保先生は、言葉を必死で選んでいる。国語のテストで、空欄に言葉を入れていく気持ちになった。だから、なのか、だけど、なのか、それでも、なのか。「そんな風に、ずっと気

にしているなんて」
「はい」
「私はそれだけでも」
声が一瞬、途切れた。
生垣のこちらでしゃがむ僕からは、先生の姿は見えない。頭の中で浮かんだ久保先生は、下を向いていた。覚悟を決めているような顔をしているのが想像できた。
「それだけでも、立派だと思いますよ」必死に絞り出すような声だった。
あとの二人の言葉は聞こえてこない。雨が強さを増した。さすがにおまえたちそろそろおしまいにしなさい、と号令をかけるかのように本格的に降り始めた。道路は一気に冷たく濡れ、しずくが音を立てる。服がびしょびしょになって、髪から水が次々と垂れていく。気持ち悪いのと愉快なのとがごちゃまぜになった。

（伊坂　幸太郎　『逆ソクラテス』から）

注1　懺悔　……　過去の悪事や過ちを悔いて他人に告白すること。
注2　今日　……　二年前に亡くなった久保先生の恋人の命日。

問1　空欄A～Cに入る適当な語を次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。
ア　ちらっと　　イ　ずっと　　ウ　ほっと　　エ　さっと
オ　びしっと　　カ　ぞっと

問2　――線部1「八つ当たりのように潤に厳しく当たってしまうんです」とあるが、潤に厳しく当たってしまうのはなぜですか。解答欄に合うように本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問3　═══線部a～dの中から、一つだけ用法の異なるものを選び、記号で答えなさい。

問4　――線部2「つらそうな口調だった」のはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア　潤の命を助けてくれた女性の命日が今日であるにもかかわらず、そのことを忘れかけていた自分自身に嫌気がさしているから。
イ　反抗期である息子の潤にいつも八つ当たりのようにきつく当たってしまうので、自分自身の叱り方が間違っているのではないかと悩んでいるから。
ウ　交通事故と関わりがあるのに、事故に遭った女性を置き去りにして事故現場から逃げてしまったという罪悪感に苦しめられているから。
エ　人に打ち明けたくない秘密を、他人である潤の担任にどうしても聞いてほしくなるくらい、息子である潤との関係に頭を抱えているから。

問５ 本文中の雨に関する描写では、登場人物の心理状態を効果的に表現し、その場の雰囲気を印象的に伝えています。本文中の〰〰〰〰〰線部(Ⅰ)～(Ⅳ)について説明した次のア～エの中から、適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 〰〰〰線部(Ⅰ)「雲が雨を洩らしはじめたのだ」という表現から、人には言いたくないことをこらえきれず、誰かに打ち明けようとしている潤のお父さんの様子を読み取ることができる。

イ 〰〰〰線部(Ⅱ)「頭に当たる雨は、冷たさよりも重さを感じさせた」という表現から、その場にいる登場人物が非常に深刻な雰囲気の中にいるということをうかがうことができる。

ウ 〰〰〰線部(Ⅲ)「雨のせいかもしれないが、それを隠そうともしていない」という表現から、潤のお父さんが交通事故と潤への接し方に後悔し、感情を抑えきれないでいることを読み取ることができる。

エ 〰〰〰線部(Ⅳ)「雨が強さを増した」という表現から、恋人を亡くして傷ついている久保先生の心が、潤のお父さんの言葉によってさらに傷を深くしている様子をうかがうことができる。

問６ ――線部３「僕の頭には電気が走った」のはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 久保先生の厳しい口調に呼応するように雨が激しくなっていき、雷までも鳴り出してその音が自分の体の中を駆け抜けるように感じたから。

イ 久保先生の恋人は交通事故で亡くなったと聞いていたが、その事故を起こしたのが潤のお父さんだったのだと思い衝撃を受けたから。

ウ 久保先生がぴりぴりしていたのは、交通事故を起こして恋人をはねた潤のお父さんを警察に連れていくためだったとわかったから。

エ 久保先生の恋人の事故をめぐって、先生と潤のお父さんが以前から面識があったことがわかり驚くとともに、この後悪いことが起こるのではないかと不安になったから。

問７ ――線部４「潤のお父さんは、見放されたかのように一瞬、表情を失った」の説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ずっと悩んでいた自分の過去を誰かに聞いてほしかっただけなのに、思いのほか冷たい言葉を浴びせられ動揺している。

イ 自分の過去を話しているだけで懺悔しているつもりはなかったのに、「懺悔されても」と言われて心外に思い、何と言葉を返そうかと考えている。

ウ 自分の過去を誰かに聞いてほしいという一方的な思いで話をしたが、親しい友達でもない先生にそれを話すのは間違いだったと悔やんでいる。

エ 自分の過去の話を聞いたら、同情して優しい言葉をかけてもらえると思っていたのに、冷たくあしらわれ悲しい気持ちになっている。

問８ 空欄Ｘに入る言葉として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 上下　　イ 左右　　ウ 縦横　　エ 前後

問９　――線部５「それだけでも、立派だと思いますよ」と言った久保先生の心情の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　事故の関係者なのに恋人をすぐに助けてくれなかったということに対する腹立たしさはあるものの、一人で育ち盛りの潤を育てている父親の様子に担任として感心している。

イ　事故の関係者なのに恋人をすぐに助けてくれなかったということに対する腹立たしさはあるものの、今まで仕事をしっかりと続け、生活することができている様子に心を動かされている。

ウ　事故の関係者なのに恋人をすぐに助けてくれなかったということに対する腹立たしさはあるものの、ずっと後悔の念を抱いていてくれたことで心の中に少し救いを感じている。

エ　事故の関係者なのに恋人をすぐに助けてくれなかったということに対する腹立たしさはあるものの、潤に厳しくあたることに反省している父親の様子を見て、ほっとしている。

問10　――線部６「気持ち悪いのと愉快なのとがごちゃまぜになった」についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　久保先生と潤のお父さんとの会話が中途半端に終わり何も解決しなかったことに対する気持ち悪さと、雨でびしょ濡れになるという今まで経験したことのないような非日常的な状況に愉快さと爽快（そうかい）さを感じている。

イ　雨に濡れた気持ち悪さと、思いきり雨に打たれることから生じる楽しさに、久保先生と潤のお父さんの間に緊迫した場面はあったものの、最終的に完全に心が通じ合い和解する場面を見届けられた満足感と達成感から愉快な気持ちが加わっている。

ウ　服が雨に濡れた気持ち悪さと、思いきり雨に濡れたことから生じる楽しさに、久保先生と潤のお父さんの会話を聞いて、久保先生が自分たちが思った通りの素晴らしい完璧な人だったという嬉しさから愉快さを感じている。

エ　服がびしょびしょになった気持ち悪さと、思いきり雨に打たれたことから生じる楽しさに、久保先生と潤のお父さんとの間に心配していたようなことが起こらなかった安堵（あんど）と解放感による愉快さが加わっている。

三　次の――部の漢字の部分はひらがなに、カタカナの部分は漢字に直して書きなさい。

①　出張でしばらく家を**ルス**にする。

②　**キケン**な場所には近づかない。

③　**サトイモ**の煮っころがしが好きな父。

④　スピーチの**ゲンコウ**を書く。

⑤　体に**セイカン**剤を吹きかける。

⑥　段落ごとの**要旨**をまとめてみよう。

⑦　父の言葉を人生の**指針**とする。

⑧　何事にも**機敏**に反応しよう。

⑨　**甘言**に乗せられる。

⑩　新しい学説を**唱**える。

四　「協働」は行政や企業で大切にされていますが、それは学校生活や日常生活でも同じです。他者と協力することが大切である理由を、具体例を挙げて百字以上、百二十字以内で述べなさい。